ヒビの美を見出す――桃山の茶陶～現代のガラス――

対談　砂澤祐子（五島美術館主任学芸員）×西中千人

柿傳ギャラリーで開催された個展「西中千人ガラスの世界」（二〇一四年十一月二十九日～十二月七日）の会期中に『ヒビの美を見出す―桃山の茶陶～現代のガラス―』と題した特別対談が行われました。砂澤祐子氏と西中の熱い語り合いを再録します。

確信犯としてのヒビの表現

司会　本日はまず日本の茶陶における呼継の歴史を、五島美術館学芸員の砂澤祐子さんと西中先生による作品解説とともに見ていきたいと思います。

砂澤　現存する最古の呼継は織田信長の弟である織田有楽の「瀬戸筒茶碗」です。十七世紀初め頃のものと考えられ、有楽の晩年の仕事と言っていいでしょう。割れた瀬戸茶碗に南京染付を入れて継いでいます。普通なら似た茶碗片を使うものですが、これは明らかに違う茶碗の破片を入れている点で、今見ても非常にユニークな作品です。

西中　確信犯ですよね（笑）。同色の茶色の陶片で継げばいいものを、わざわざ全く違う染付を入れているところが素晴らしい。

砂澤　次に紹介したいのは本阿弥光悦の赤楽茶碗「雪峯」。重要文化財です。一昨年、五島美術館で光悦展を開催した時にも大変人気を博しました。おそらく出来上がった段階では失敗作だったと思います。その失敗作を漆で、しかも金色にして継いでいます。

（1）瀬戸筒茶碗　永青文庫蔵

西中　私、この作品が大好きなんですよ。実際に見ると、ヒビの幅がものすごく広いし、強引な継ぎ方がカッコいい（笑）。たぶん、窯から出したときはかなりひどい割れ方だったんじゃないかと思います。

砂澤　今のところ、光悦は楽家でこれを焼いたであろうと言われています。光悦の屋敷と楽家とは近いんですね。散

（2）赤楽茶碗 銘 雪峯　本阿弥光悦 作

歩がてらに訪れた楽家で「こないだ頼んだの、どうや？」とか何とか言ったんでしょう。で、焼き上がったものを見たら見事に割れている。そこでハタと金色で継ぐことを思いついたのではないでしょうか。推察に過ぎませんが（笑）。楽家の作品なら確実にＮＧになっています。

西中　プロならそれが当然ですよね。でも、ヒビがなくてツルンとしていたら、これほど印象深い器にはなっていなかったはずです。

司会　「西中呼継」と雰囲気は似ていますね。

西中　ありがとうございます。たぶん継ぎ方の強引さが似ているのでしょう（笑）。

呼継は日本の独創文化

砂澤　高麗茶碗の「三作三島」も面白いですね。一つの茶碗に「三島」「刷毛目」「粉引」と三つの要素が入っているわけですから、贅沢と言えば贅沢ですね。土から掘り出した三つの陶片を継いだとも考えられます。時代的には江戸初期でしょうか。

西中　現代の感覚から言っても非常に前衛的ですよね。何百年も前にこういうことをする日本人がいたことに素直に感動します。

砂澤　西中さんの呼継につながる作品と言ってもいいのが、松本耳庵さんが所蔵されていた「雷（いかづち）」という銘の志野茶碗。破片を削ってつなぐなど、なかなか大胆な作品です。

西中　ここまで来ると、割れたものを修復するというより、継ぐことを楽しんでいるように感じられますね。

砂澤　おっしゃるとおり、ヒビに美を見出し、継ぐことの面白さを独自の感覚でとらえていますね。

西中　こういう作品を見ると、先入観なしにヒビってきれいだと思ってしまうわけですよ。「雷」という銘が象徴するように、ヒビの入り具合に、空気を切り裂き、稲妻が走る光景を見たんでしょうね。つまり、ヒビをなかったことにするのはもったいない。そこでヒビを生かすために漆で継ぐことを思いつき、漆屋さんに行く。すると、漆職人は蒔絵もするから、金箔も使っているわけです。

砂澤　確かに身近な素材ですよね。私も金継誕生の背景はそんなところだと思います。

西中　ところで、桃山時代にお茶をやっていたのは侍ですよね？

砂澤　あとは裕福な商人ですね。

西中　そこで、私はさらに妄想してしまうわけですよ（笑）。金継や呼継を最初にやったのは「他に誰もやってないなら、俺がやってやる」という進取の気風を持った侍だったのではないかと。その侍がお茶席でヒビの美しさをデザインした器を仲間たちに見せ、彼らもそのカッコよさを認めた。そこから金継、呼継の文化が広がり、後世に残ったんではないでしょうか。

砂澤　薄暗い茶室の中にあって、金で継いだお茶碗はかなり衝撃的だったと思います。

西中　記録によれば日本で初めて窓にガラスが入れられたのは一七五五年ですから、桃

（3）志野茶碗 銘 雷（いかづち）

山時代の日本家屋などは相当薄暗かったでしょうね。しかも金はエジプトの太陽神がその典型ですが、太陽の輝き、つまり神仏の神々しさを表現する物質です。

砂澤　秀吉が天皇に献じた金の茶室も天皇を太陽と崇めるなら、一番のおもてなしであったわけです。

西中　単なる成金趣味ではないですね。

砂澤　たまたま秀吉だから誤解されている面はありますね。私も西中先生と同様に金は太陽の力を表現するものだったと考えます。

ヒビに生や死の美学を見た侍の価値観

西中　もう一つ、私はヒビの美が桃山時代の武士によって見出されたのは彼らが激しく刀を交え、生死を賭けた戦いをしていたからだと考えています。器にとってのヒビや破損は人間の肉体にたとえれば致命傷にもなる大きな傷です。そこに生や死の美学を見たところに侍の価値観を感じます。しかも、それは日本固有の文化。エジプトやギリシャ、ローマには三千年、四千年の歴史があり、壊れた食器、ヒビが入った食器は無数にあるはずです。しかし、そこに美を見出す文化はついに生まれなかった。つまり、金継も呼継も日本人独特の美意識のたまものであり、だからこそ私は一層入れ込んでしまうわけです。

司会　さて、ここからは西中さんの呼継に話を移したいのですが、ガラスの呼継がどのようなプロセスで作られるのかを簡単にご説明ください。

西中　まず色のついたガラスの器を何個も作り、これを割ります。割ってきれいなヒビが出ることもあれば、全くダメなこともあります。こうしてヒビのきれいなものを組み合わせて七百度くらいで焼くと、互いに溶けてくっつくわけです。ただし、異なる色を幾つも使う場合、色によって混ぜる金属の種類が違うため、溶ける温度が異なるんですね。だから、くっつけるのが難しい。ガラスがなかなか言うことを聞いてくれません。

司会　一つの呼継の背後には何個も、何十個もの作品があるわけですね。凄まじい精神エネルギーを感じます。そもそも、このような発想はどこから生まれたのでしょうか。

西中　私がガラス美術を学んだのはアメリカです。ベネチアンガラスも散々学びました。結構うまいんですよ（笑）。でも、日本人がベネチアンガラスにどんなに習熟しても評価されません。ゴッホの模写を一生懸命やっても「ゴッホとそっくり」としか言われないのと同じです。欧米で芸術

砂澤祐子／いさざわ ゆうこ

1958年北海道生まれ。中央大学大学院文学研究科東洋史学専攻博士課程前期終了。現在五島美術館主任学芸員。専門は中国陶磁史。企画した主な展覧会に「茶の湯　名碗—茶碗に花開く桃山時代の美」「茶の湯 名碗—新たなる江戸の美意識」「向付—茶の湯を彩る食の器」「光悦—桃山の古典」（すべて五島美術館）などがある。

家が問われるのはオリジナリティであり、アイデンティティ。では自分にとってのアイデンティティは何か。そのような日本人にしかない美意識を探し求めたとき、私が出会ったのが、今から四百年も前にヒビに美を見出した日本の文化でした。

司会　砂澤さんは「西中呼継」をどのように評価されていますか。

砂澤　一般にヨーロッパや中国ではシンメトリな、完成された美しさに対して高い評価が与えられます。一方、日本では歪んだもの、あるいはヒビが入ったものに美を見出す文化があります。西中先生がご自身のアイデンティティを追求される過程で呼継に出会ったのはお話をお聞きするとよくわかります。しかもガラスという、より難しい素材を通してそれを表現されようとしている。その美しさを真に理解できるのは日本人だけかもしれないという気もしますが、同時に、ガラスという素材で日本の美意識を世界に向けて発信されているところに志の高さや意気込みの大きさを感じるわけです。

不完全な美を求めて

西中　岡倉天心が外国人に向けて日本文化を紹介するためにニューヨークで刊行した著書『茶の本』（原題 The Book of Tea）にこんな一節があります。「不完全な美を自らの内で完全にできる者のみが真の美を見出せる」。この言葉に日本の美意識は集約されていると思います。私の作品を見て、日本の文化に親しくない海外の方には大いに日本を感じてほしいし、日本の方には「前衛」を感じていただけると嬉しいですね。そんなことを思って日々作品を作っています。

司会　最後に「西中呼継」のこれからを語っていただきましょう。

西中　エミール・ガレは日本のデザインに多大な影響を受け、それを自分流に解釈して巧みにガラスで表現しています。

私は一人の日本人としてそれが非常に悔しい。

つまり、ガレの時代から百年以上の歳月が流れた今、この時代の日本を生きる者として、日本の伝統文化をどう解釈し、表現するかが問われているように思うのです。もっと具体的に言えば、四百年も前にヒビの美しさをデザインして器を作った日本人の美意識を私なりどこまで咀嚼し、その豊かさをガラスで表現していくのか……。そこをとことん突き詰めていきたいですね。

＊画像（1）、（2）、（3）は、展覧会図録より複写させていただきました。

「呼継」（P.3）13.5x13x 高さ 9cm　「呼継」（P.4）21.5x19x 高さ 36.5cm

協力／柿傳ギャラリー　構成／米谷紳之介